



町の子供は町で育てる

「3つの合言葉」元気・学び・会話

滑川町教育委員会だより

「学んでよかった町へ -チーム滑川での教育-」

本来のリテラシーを今

最近、日本のマンガやアニメに触れて日本文化に関心を持った人が小説にも手を伸ばした結果、海外で日本小説ブームが起こっている。日本では、マンガ、アニメをきっかけに小説を手にとることが起きるだろうか？日本での本離れは高学年になればなるほど進み、「学校読書調査」によると1ヶ月間に本を一冊も読まない「不読者」率は高校生で55・7%に及んだ。「リテラシー」は文字の読み書き能力のことで「識字」と訳される。移民との共生が課題となっている諸外国では、リテラシー教育は大きな社会事業である。それに対して日本では、日本人なら誰もが日本語が読み書きできるとされており、識字率100%の神話が邪魔をして、本来のリテラシーを考える習慣が確立されていない。本来のリテラシーとは、字面の読み書き能力にとどまらない母語運用能力のことであり、十分な長さの文章を通じて自分の思想や信条を表現し、十分な長さの文章から他者を理解すること、つまり必要とあれば本が書け、本が読める能力までも含む。マンガ、アニメ、ネット動画などで伝えられる視覚情報は、現実の模写か、実写なのかの違いこそあれ、具体的な何かを描いている。それに対して文字は、原始的な象形文字から進化した段階で具体的な「もの」と切り離された純粋な「記号」となった。「記号」だからこそ現実世界に縛られない自由な表現や、抽象的な議論の核心を担える。記号としての文字の価値を認識しない社会では、電子コミックやアニメなど文字以外のメディアを楽しむ経験をした人が文字の作品に戻る道は細いものとなるだろう。

これは、7月7日の毎日新聞に掲載された専修大学教授で評論家の武田徹さんの「本来のリテラシーを今」と題する文章の要約です。本を読まない人とは、**本を読もうとしない人ではなく、実は本を読めない人**だということです。では、どうしたら本来のリテラシーを身につけることができるのでしょうか。

私は、作家の田辺聖子さんのお話が思い出されました。河合隼雄対談集『あなたが子どもだったころ』（楡出版）に載っていたお話です。田辺さんは「小学校6年から女学校の2年生くらいまで大きな古本屋さんで万引きしたいという衝動に悩まされた。お金があるときに限って万引きしたくなった」と告白しています。田辺さんのこの万引き衝動は、あるときにすっと消えたそうです。そして、万引き衝動が消えたころから、物語が次から次へとあふれるようになってきて小説の真似事を書くようになったと言っています。

この田辺さんの変化について心理学者の河合さんは「おそらく、そこから、ものを盗る、ものを取り込むんじゃないくて、ものが言葉になって外へ出るようになったんじゃないかと思いました。だから物語にできるわけですね」と解説しています。古本の万引き衝動も言葉の獲得の願望だということです。田辺さんは小さい頃から本を読むのが大好きでした。日本の古典はもちろん少女雑誌などありとあらゆるジャンルの本を読んでいた。そういう力のある言葉が、田辺さんの心に積みり積みり、ある時から今度は自分を表現する言葉としてあふれ出したのです。

私たちがリテラシーを身につける機序とはどのようなもののでしょうか。私たちは母語について、予備知識ゼロの状態から学ぶとはなしに学び始めて、気がつくと母語を不自由なく運用できるようになっています。親が文法知識を教えてくれたわけではないし、辞書の引き方を教えてくれたわけでもありません。気がついたらいつの間にか言葉の意味がわかっていて、難しい言葉も使えるようになっているのです。これは、日本語を浴びるように読み、聴くことを続けてきたことによって身についた力です。大切なことは、字面の読み書きができるようになった後も「美しく豊かな日本語を読み、聴くこと」を続けることです。「美しく豊かな日本語」をです。身に浴びる言葉を子どもたちは頭で理解するわけではありません。身体で受け入れるのです。胸に響いたり、肚に落ちたり、骨身に沁みたりしながら、他者の言葉は身体の中のどこかに長い間留まります。そして、ある日、ふとその言葉の一つが口を衝いて出る。その時に、私たちはその言葉の意味を理解し、「自分の言葉」になります。人はある日出力することによって、遠い昔入力した言葉の意味を理解し、それを「自家薬籠中の物」とする。それが人が言葉を会得する機序なのです。田辺聖子さんの逸話も言葉を会得する機序で説明できると思います。

「あなたの御言葉が見いだされたとき わたしはそれをむさぼり食べました。あなたの御言葉は、わたしのものとなり わたしの心は喜びおどりました」（エレミヤ書15章16節）これは、旧約聖書の言葉です。



図書館からのおすすめ絵本



図書館オリジナルキャラクター
ブックろう

図書館では、家族と一緒に本を読むことで、読書に親しんでもらうとともに、
家庭内のコミュニケーションを深めることを目的とした「家読」(家庭読書)を推進しています。
こどもも大人も楽しめる、家読にぴったりの絵本をご紹介します♪



『みんなだいすき』
しば あかね・ともる/作
しば ともる/絵
矢祭町「子ども読書の街」
づくり推進委員会

『みんなだいすき』

こんな人におすすめ

身近な幸せを、誰かと一緒に喜びたい方へ

この本は、福島県矢祭町で開催された令和2年度の「第11回矢祭もったいない図書館手作り絵本コンクール【家族の部】」の最優秀賞作品です。

お母さんの「日々変化していく幼い娘の絵を形にして残したい」という思いと、当時4歳のお子さんの日常にあふれる「だいすき」が絵本いっぱい詰まっています。この作品を通して、こどもの「だいすき」という真っ直ぐな気持ちは、それを周りで支える誰かの優しい眼差し、想いがあるからこそだということに気づかされます。読んだ後、胸がじんわりと充たされる一冊です。

当館では、同コンクールで賞を受賞し、製本された絵本を複数蔵書してます。他の受賞作品もぜひご覧ください。

※この本は、滑川町立図書館に所蔵があります(貸出中のときは予約ができます)

文化財シリーズ!
第17回

「滑川町の歴史」 part17

古墳時代の滑川町～先端技術の導入ー須恵器生産と須恵器窯ー～



エコミュージアムセンター
オリジナルキャラクター

令和7年10月号で土師器と須恵器2種類の器の紹介をしましたが、須恵器は、韓半島南部の窯業技術が導入されたことで、諸説ありますが4世紀末から5世紀初頭に生産が開始されました。大阪府堺市、和泉市、岸和田市、大阪狭山市にまたがる泉北丘陵に位置する陶邑窯跡群(5世紀～9世紀半ば)は、須恵器生産の中心地で約854ヶ所の須恵器窯の存在が把握され、総数は1000基以上とも言われる国内最大規模の生産地です。陶邑で生産された須恵器は、水路や陸路で運ばれ、北海道から鹿児島まで各地に供給されていたことが分かっています。古墳時代中期後半以降には、日本列島各地に須恵器生産の技術移転が為され、愛知県猿投窯跡群(5世紀後半～13世紀末頃)や静岡県湖西窯跡群(5世紀末～14世紀末)、鳩山町を中心とした南比企窯跡群(6世紀初頭～10世紀前半頃)を始めとした地方窯が定着していきました。

滑川町の古墳時代の窯跡は、埼玉県指定史跡の五厘沼窯跡群(羽尾)、町指定史跡の平谷窯跡群(羽尾)、花気窯跡(中尾)の3ヶ所が確認されています。これらの窯跡は、比較的近い距離にあり、全て6世紀末～7世紀初頭に須恵器を生産していました。また、平谷窯跡群だけは寺院に使う瓦の生産も行っていました。この時期は、中心地であった陶邑や大規模な地方窯などから、より地方へと生産地が拡散する時期でもあり、その導入者や技術的系譜などはっきりとしない部分もありますが、当時の滑川にも先端技術である須恵器窯が導入されました。

五輪沼窯跡群



平谷窯跡群



花気窯跡



★町内3窯跡出土の須恵器の一部を、エコミュージアムセンターにて展示しています! 展示期間:8/4(火)～8/30(日) 10:00～17:00

○8月の休館日:毎週月曜日及び8/11、8/16は、休館日のため休展です。